

創刊130周年

令和に羽ばたけ
長崎新聞とわたし130の話
主な出来事と本紙の歩み

2、3、5面
6～9面
10、11面

伝えたい!
新聞の力
～人と向き合って～

長崎新聞はきょう5日、創刊から130年を迎えました。ルーツとなる「長崎新報」が1889(明治22)年に発刊。長崎の今を見つめ、過去を振り返り、古里の未来を考えてきました。
「第2部」では、その歩みを年表形式でたどります。読者の皆さんが寄せたエピソード「長崎新聞とわたし」を130人分掲載。明治、大正、昭和、平成、そして令和へ。新時代に大きく羽ばたく7人の決意も紹介します。

長崎新聞

発行所
長崎新聞社
長崎市中野町3-1 〒852-8601
C長崎新聞社2019

人生を懸けてやり切る

第2部



全日本強化選手としてナショナルチーム入りから今年で10年目になった空手女子組手55kg級の中村しおり選手(エス・ピー・ネットワーク)は、2020年東京五輪を「出るだけ」で人生が変わる特別な舞台に位置づけている。今までの人生を懸けてやっていく。悔いのないようにや

り切りたい。長崎市出身、父の影響を受けて、幼い頃から近所の道場「無門館」に通った。だが、南長崎小2年で初めて出た大会は、団体形で敗々な結果に終わった。見ている両親からしたら、恥をかいたと思う。そこからちゃんと練習するようにになった。道場だけでなく、自宅のアパートでも文と稽古するようになった。テブルを部屋の脇に置いて、マットを敷き、ひたすら父と組手の日々。それでも、全国で上位に絡めるような結果は出せず、小ヶ

倉中時代は組手で一度も全国へ行けなかった。その悔しさから、高校は親を離れて岡山の強豪校へ進学。本生活をしながら、厳しい練習に打ち込んだ。髪は毛も短く刈り上げて「空手ばかりやってた」結果、眠っていた才能が徐々に開花。3年時にアジア大会で優勝するほどに成長した。



「一戦一戦頑張ってポイントを取りに行く」と語る中村選手。大崎市、エス・ピー・ネットワーク大阪支社(津崎武雄撮影)



空手女子組手55kg級

中村しおり選手(26)

小ヶ倉中出身、エス・ピー・ネットワーク

2019年9月5日撮影。長崎新聞社記者(左)と中村選手(右)が練習中。写真:津崎武雄

令和に羽ばたけ

大学は名門の京都産業大に進んだ。同期で同じナショナルチームの植草選手(JAL)・大野ひかる選手(天石消防)からの影響を受けて「ここまで続けることができた」。15年に入った会社の協力も大きかった。今は大崎市内の職場で午後2時まで働き、それから京産大へ通って練習に励んでいる。

現在は55kg級の日本第2位。世界ランクは10位につけている。だが、五輪の実施種目は50kg級と55kg級が統合され、階級別の世界ランク上位者が代表入りすると決まった。50kg級には世界ランク3位の高原実穂選手(帝京大)がいる。「まさかかな」とは、でも何かあるからならない。最後まで本当に頑張るだけ。6日からは昨年優勝したプレミアリーグ東京大会が始まる。ひた向きに国際大会でポイントを重ねていく。一生に一度の夢舞台に立つ自信を信じて。

(中島崇雄)

略歴

なかも・しり、小学生から無門館で空手を始め、親戚の佐藤尚武館で大会に出場。小ヶ倉中からわかやま山陽へ進み、3年時にナショナルチーム入り。アジア大会で優勝した。京都産業大から2015年にエス・ピー・ネットワークへ移籍。18年プレミアリーグ東京大会で女子組手55kg級を制した。息抜きはカフェでホットコーヒーを飲むのが好き。26歳。100cm、56kg。長崎市出身。



銀行は、働く人への応援業だ。